



<資料>ミャンマー国シャン高原における陸稲の収穫  
とタウンヨー族の打ち付け脱穀石

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅本, 信也, 石神, 真智子, 山口, 裕文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00009684">https://doi.org/10.24729/00009684</a>

## ミャンマー国シャン高原における陸稲の収穫と タウンヨー族の打ち付け脱穀石

梅本信也・石神真智子\*・山口裕文\*

(京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所：〒649-3632 和歌山県西牟婁郡串本町須江,  
\*大阪府立大学農学生命科学研究科生態保全学研究室)

### A note on harvesting of upland rice and “Kyaukto,” a stone for threshing of grains, in Shan Highlands, Myanmar

Shinya UMEMOTO, Machiko ISHIGAMI and Hirofumi YAMAGUCHI\*

(Subtropical Plant Institute, Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Kushimoto, Wakayama  
649-3632, Japan, \*Laboratory of Conservation Ecology, Graduate School of Agriculture and Biological  
Sciences, Osaka Prefecture University, Sakai 599-8531, Japan)

#### Abstract

Harvesting of rice with volunteer weeds and threshing for rice grains by Kyaukto, a pillow-like device, which is made of Palaeozoic limestone, were found in the upland rice fields near 12 and 29 km northern to Kalaw, Shan state in Shan Highlands of Myanmar. Rice was frequently harvested with volunteer weeds and relic millets such as *Setaria italica*, and *Echinochloa* sp. in the area. The Kyaukto device was used for threshing rice grains by an ethnic minority, the Taungyo, belonging linguistically to the ancient Burmese family. Several female persons harvested upland rice at the bottom by a small-size sickle to bind and carry rice bundles with ears to the threshing place (ca. 10 m by 10 m) covered with 16 sheets of bamboo carpets. On the threshing carpets, nine, young, barefooted male persons had standing positions on the circle facing to the center, and each man beat the rice bundles on the stone. The stone was set with two bundles of rice straws ringed compactly in order to keep the stone surface at an angle of 30 degrees. Rice grains were gathered and the unnecessary parts were removed skillfully by a bamboo stick. Finally, two female persons winnowed the rice grains and got rid of dusts and trashes for cleaning.

**Key Words:** Taungyo people, Kyaukto, threshing, upland rice, Shan Highlands

#### 緒 言

ミャンマー連邦は、面積が67.7万km<sup>2</sup>、1997年現在で人口が4640万人の仏教国である。この国には、全体の約70%を占めるビルマ族以外に135の少数民族がいる。サバンナ景観が広がるミャンマー東部のシャン高原にはそうした少数民族の一つであるタウンヨー族やパオ族が居住し有畜農業を営んでいる。彼らは、古生代に起源する母岩からなるシャン高原のサバンナ丘陵の畑地にトウモロコシ *Zea mays* L., ワタ *Gossypium hirsutum* L., キバナタカサブロウ(niger seed) *Guizotia abyssinica* (L. fil.) Cass., エゴマ、コムギ *Triticum aestivum* L.,

オカボ *Oryza sativa* L., トウジンビエ *Pennisetum americanum* (L.) Leeke やヒマ *Ricinus communis* L. などを栽培し、天水田にはイネ *Oryza sativa* を栽培している。私たちは、2000年11月22日から24日にこの地域を調査する機会に恵まれたが、雑草と雑穀が混生する陸稲の収穫と打ち付け脱穀に用いられる Kyaukto と呼ばれる脱穀石をみることに出来た。この事例は、中国南部から東南アジアに広くみられる稲の打ち付け脱穀の民俗に関する考察の上で意義深い。小論ではその概略を記述しておきたい。

### 陸稲の収穫の概要

シャン州Kalawから北に16km入ったKalotan Nayngsa村ではカレン族の一支族とされるパオ族が居住する。彼らによる陸稲の栽培・収穫は次のようである。陸稲は、雨期の8月ごろ移植され11月に丸い鎌で緩斜面畑の下側から順に女性によって収穫される(図1)。彼女たちはビルマ族と同じように頬にタナカとよばれる植物性顔料を塗付しており、スカーというロングスカートを着用していた。イネの収穫には大きく曲がった鎌を使い(図2)、後作のためには、鋤やレーキを使う(図3)。陸稲のイネの桿長は時に腰あたりとなる。おおむね生育は良くなく、有効分けつは多くない。しかし、陸稲としては、比較的良い部類にはいる。畑の中には、いくつかの雑草の発生がみられる。Wah(1996)の分類に従うと、カッコウアザミ *Ageratum conizoides*, メヒシバの一種 *Digitaria* sp., オヒシバの一種 *Eleusine* sp., *Siegesbeckia* sp.である。オカボ畑には、ときにアワ *Setaria italica*や6倍性で非脱粒のヒエ属植物の一種 *Echinochloa*があり(石神ら, 2001)、ヒエの一種は1㎡あたり1個体くらいの密度で混生する(図4)。イネと同じほど成熟し

たヒエやアワと一緒に刈り取られ結束されて(図5)、住居へ運ばれているが、未熟の雑穀は、イネの収穫後も畑に立毛状態で残され(図6)、牛などの家畜用に使われる。パオ族は、アワやヒエなどの雑穀の種子を陸稲畑には意識的には播いておらず、自然に生えてくるといっている。オカボの中に生える雑穀は、家畜用のvolunteer cropの役割を果たしており、半栽培の一種とも言える。近くには現在栽培されている雑穀の畑は皆無であるから、こうした雑穀は、近年、政府の指導で導入されたキバナタカサブロウ(図7)などの油料作物の面積拡大の以前に広く栽培されていた時の名残りかも知れない。この近くのシャン高原では、陸稲の畑がずいぶんと見られ、イネは結構良い実りを示していた。

### タウンヨー族の打ち付け脱穀

タウンヨー族の打ち付け脱穀は、Shan州西部のPindayaとAungbanを結ぶ地方道で、Kalawから北に29km北上した地点の丘陵で確認した。タウンヨー族は、古いビルマ語の特徴を残した方言を話すと言われる(河瀬, 私信)。



図1



図4



図6



図2



図5



図7



図3

図1：シャン高原における陸稲の栽培

図2：陸稲の収穫に向かうパオ族

図3：農作業に向かうパオ族の女性

図4：陸稲畑に混生するヒエ属植物

図5：収穫され、結束されたオカボの束

図6：パオ族のオカボ畑で刈り残されたヒエとアワ

図7：近年導入の油料作物ニガー・シード(キバナタカサブロウ)

タウンヨー族の男性9人と女性7人は、黒や茶色のコフ牛に引かれた7台の牛車(図8)で陸稲畑に乗り付けていた。かれらは、まずは鎌で陸稲畑のイネを刈り取り始める。南に緩く傾斜した陸稲の畑にはモロコシやアワもときに混入しているか、わさと刈り取らずに残されている。これらは牛の用途とする。腰より低いくらいに生育したオカボを適当な間隔で刈り、株に載せていく。このオカボは結束された後、並行して設営される脱穀場に運ばれる(図9)。男性達が脱穀場を準備する。大きさが約2.5m四方の竹製奠座はpiaとよばれるか、彼らはこれを少しずつ重なるように敷き詰めて、一辺か10m四方の正方形とする。

次に、kwiとよばれる結束した1把分のワラ束同士を株もとの部分で巧みに指交させ、長さか80cmくらいに繋ぎ合わせたものを3セット用意する。それを合わせて丸く折り曲げて、hmiと呼ばれる竹ヒゴを巻き付けたトラス型のワラ枕を作成する(図10)。竹ヒゴは、竹をナタで割って作成すると

いう。このワラ枕は直径か不均一で、「の」の字のように片方が細く、もう片方が直径10-15cmくらいある(図11)。このワラ枕に、予め用意した一辺か25cmで厚さか8cmの石kyauk-toを載せる。打ち付け面が約40度位になるように載せて完成である(図12)。石は赤色で、古生代に形成された石灰岩で風化か進んだものと推定された。

先に準備した奠座の中央に直径4-5mの円を描いたように打ち付け用石枕を並べる。3個ずつかより近くなるようにして、3組を配置し、9個を配置する。石の打ち付け面は、すべて内側に向かって下になるように置く。こうして打ち付け脱穀場か完成する。中央付近には、のちにゴミ払いに使われる竹の鞭かおかれる。この鞭は1mくらいあるか、もとは牛車用である。

9人の男達は、履き物を脱いで奠座に入り、それぞれ所定の位置に互いの顔を見るように立つ(図13)。主に女性によって脱穀場付近に積み重ねられたワラ束を2把ずつ両手に持つ。両手のワラを同

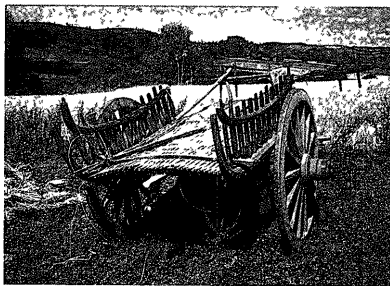


図8



図11



図14



図9



図12



図15

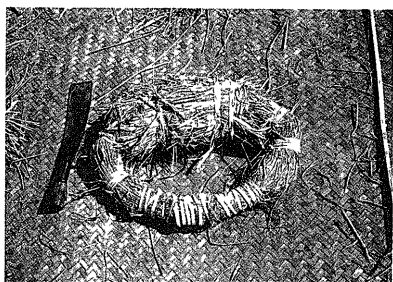


図10



図13

図8 : シャン高原のタウンヨー族の牛車

図9 : 脱穀場へ運ばれる陸稲

図10 : kyauk-toといわれる脱穀石のワラ枕

図11 : 別の部族が用いたワラ枕

図12 : 脱穀石の設置

図13・14 : 脱穀石にオカボ束を打ち付ける光景

図15 : タウンヨー族の弁当

時に打ち付け石に4回叩きつけ、つきに交互にワラ先を4-6回叩きつけて籾を脱穀する(図14)。最後に、持ち替えてワラの株もとの方を石に2-3回叩きつける。中央に籾の小山が出来ていく。時々、若い男が鞭でワラ屑などを一旦中央に集めてから外側に叩き出す。ワラ束の打ち付けに特にリズムはない。打ち付け脱穀の途中、男達は談笑し、各人は適当な間隔で休憩を取る。したかって、9人が揃って石にワラ束を打ち付けることは少ない。30-60分ことごとく全体休憩のときには立ち姿勢で、サトウヤシ *Borassus* 属の樹液から作った砂糖菓子などを舐めていた。

脱穀が終わると、2人の女性が真産中央に向かい合って立ち、蓑に籾を入れて頭高くかさして風選し、ゴミを取り除く。

作業は一日を通して行われるらしく、弁当としてハナナ(?)の葉に包んだ飯を持参していた(図15)。飯は淡いピンク色で、甘く味付けされており、アワやヒエは混ざっていなかった。

このような光景は、シャン州のPindayaからTaunggyiに至る各所で見られた。天水田でも一筆の中央付近に脱穀場を設営し、同じように石枕で脱穀しているのか確認された。また、Inle湖周辺では、民族名称は不明であったか、マレー周辺に見かけられるような横木にイネ株を打ち付ける脱穀も見られた。

稲作の類型で分類すると、ミャンマーは、西のイントやハンクラテシュと地勢を同じくしているため、イント型の牛蹄脱穀地帯であると考えられる。100年以前の上部ヒルマとシャン高原諸州の地誌を詳細に記載したScott(1900)によれば、上部ヒルマとシャン諸州の稲作は、低地灌漑稲作naと高地天水稲作haiに区分されている。haiでの収穫および脱穀方法は記述かないか、前者については次のように記録されている。「収穫は、稲穂の部分だけをキサキサ刃の小型鎌で切り取り、それ以外の部分は立毛状態で牛に食べさせたり、焼いたりあるいはそのまま放置する。穂は束ねられ、性別に関係なく畑で脱穀する。籾を集めて風選し、夾雑物を取り除く」。おそらく昔は、シャン州の高地天水田でも同様な収穫および脱穀風景であったであろう。Scott(1900)は、イントの牛蹄脱穀を知っていたであろうから、シャン高原とその周辺では、インドと似たようなタイプの脱穀が行われていた可能性は高い。当時のタウンヨー族の脱穀方法については、さらに検討したい。

このようにシャン高原では、上記の石枕を用いた打ち付け脱穀とマレー周辺に良くみられるよう

な、台に渡した木の棒に稲束を打ち付ける脱穀が普通であった。隣接するタイ国やベトナムでも打ち付け脱穀と牛蹄脱穀が見られるか(Umemoto *et al.*, 2000)、その中には牛蹄脱穀から打ち付け脱穀へのシフトも見られるようである。シュレッシンク・フロアのうえて牛のかわりに耕耘機をもちいた牛蹄脱穀かハコー付近でみられた。

Masanaga *et al.*, (1998)は、木の破片や石くれによる水稲打ち付け脱穀を中国貴州省で観察している。この脱穀法とタウンヨー族の石枕脱穀には直接の系譜関係はないと思われる。しかし、私達かみたタウンヨー族の脱穀石は、打ち付け脱穀の起源と系譜を考察する上で極めて重要な事例と言えよう。

また、ミャンマーの中央平原には動力式の回転脱穀機が導入され始めており、首都ヤンゴンに近づくにつれて多数の回転脱穀機が認められるなど、近代化もすすんでいる。このようななかで、イントの文化・文明と中国の文化・文明の両方の影響を受けてきたミャンマーの脱穀様式かどのよな運命をたどるかは興味深い。

## 謝 辞

ミャンマー旅行中は、ミャンマー中央農業研究所のSeed Bank Project (JICA-MAS) のチーム・リーダーである河瀬真琴博士とそのご家族や、彼のスタッフに大変にお世話になった。京都大学アフリカ地域研究センターの竹田晋也博士には、ミャンマー関係資料を紹介していただいた。ここに御礼申し上げる。

## 引用文献

- 石神真智子・山口裕文・梅本信也・河瀬真琴 2001 ミャンマーのヒエ属植物 雑草研究47(別) 200-201
- Masanaga, Y, Umemoto, S and Yamaguchi, H 1998 Traditional devices for threshing rice seeds in Yun-Gui Highland, China Bul Osaka Pref Univ, Series B 50, 1-10
- Scott, James G 1900 Gazetteer of Upper Burma and the Shan States (Reprinted version, originally published by The superintendent, Govt Print, Burma, Rangoon)352-356, AMS Press Inc, New York
- Umemoto, S, Nguen D T and Yamaguchi, H 1999 Traditional devices for threshing rice grains in northern Vietnam Sci Rep Coll Agric Osaka Pref Univ 51 39-45
- Wah, Saw Ler (1996) Some major weeds of Myanmar 223p MAS, Ministry of Agriculture, Yangon

(2001年2月8日受領, 2001年2月9日受理)